

言語管理モデルからインターアクション管理モデルへ

Towards a model of interaction management

リサ・フェアブラザー (千葉大学社会文化科学研究科)
Fairbrother, Lisa C. (Chiba University)

1. はじめに

本論文は管理理論に関する理論的考察である。特に理論的に曖昧な点、従来注目されてこなかった新たな現象を提示することにより、管理モデルの若干の変更を提案したいと思う。

言語管理はもともと言語政策研究の一部として言語及び社会言語的な様相の研究から生み出された (Jernudd と Neustupný 1987)。言語管理理論を採用することにより、さまざまな研究者がコミュニケーションの運用プロセスに焦点をあてた研究を行ってきた Asaoka 1985, Marriott 1990, 1991, 1993, Miyazaki 1997, Fan 1994, 1999, Masumi-So 1997, Neustupný 1985, 1994)。しかしながら、管理理論をインターアクション、つまり社会言語及び社会文化的な要素の強いやり取り、に適用しようとする (Asaoka 1985, Marriott 1990, 1991)、現代のモデルには不十分なところがある。特に評価の段階では、今のモデルは単純すぎるのが諸調査から明らかになりつつある。

狭い意味の言語の運用では、言語的逸脱のほとんどは正しいか正しくないかによって評価できる。この正しいか正しくないかということは、肯定的評価及び否定的評価と関係する。言語使用を正しくないと判断し、それを否定的に評価すれば、調整計画を立てることができる。ところが、コミュニケーションやインターアクションのデータを分析する時、更に複雑なプロセスが現れる。たとえば、否定的評価と肯定的評価の間にある評価も存在する。Marriott (1990) と Miyazaki (1997) で提示された管理理論モデルではこうした修正をはっきり言明している。彼らのモデルでは否定的評価と肯定的の間に中立した評価を入れている。

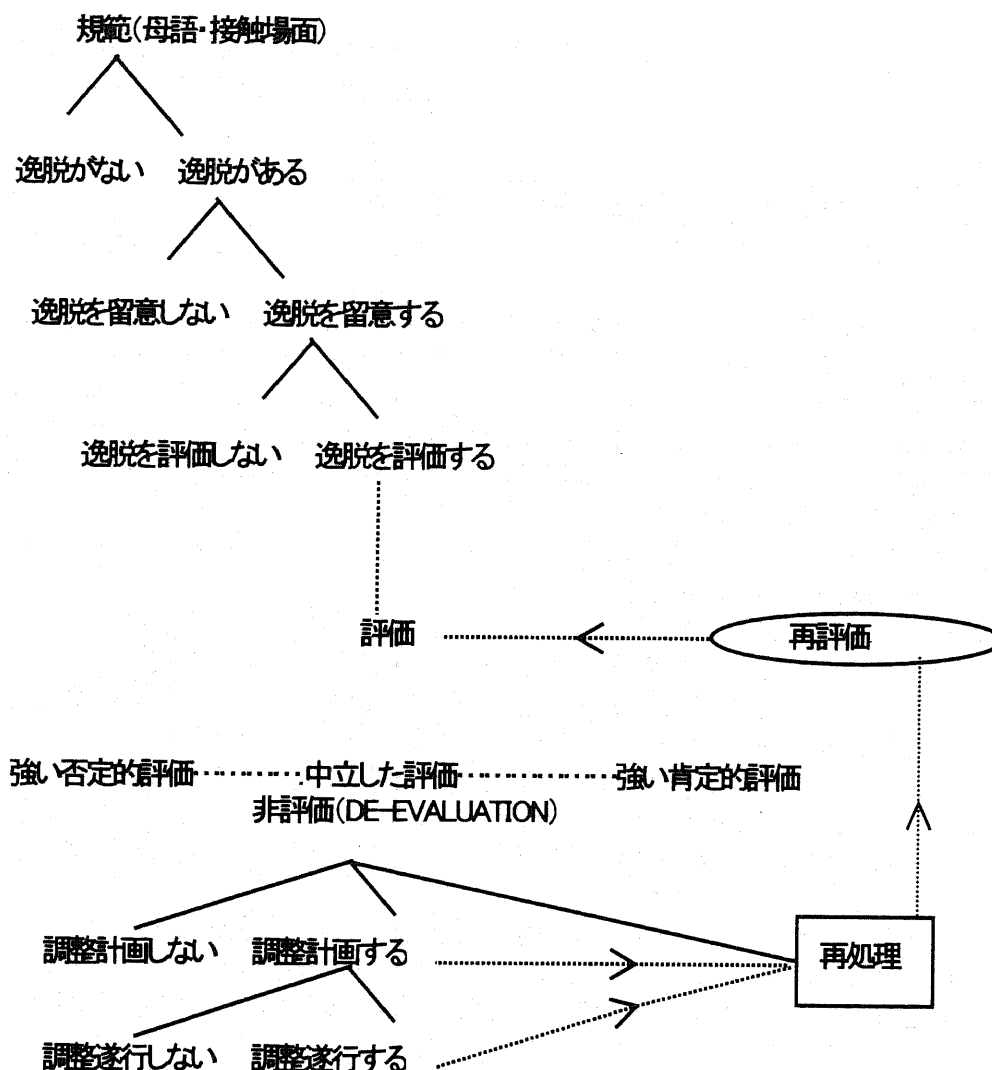
本論文では、拙稿 (1999) のデータに基づき、社会文化、社会言語的要素の強いインターアクションのプロセスについて、理論的に留意と評価の段階を考え直そうとした。又、現在のモデルに含まれていないもう一つの段階である「再処理」についても詳述したい。

2. データ

本論文で扱ったデータは 1999 年 2 月と 7 月に行った調査からとったものである。日本の大学で留学生と日本人学生が自由に使える部屋 (交流室) があり、そこで行われている自然なインターアクションを録画し、参加者にフォローアップ・インタビューを行った (Neustupný 1994a)。以下の例の日本語非母語話者と日本語母語話者のインターアクションから得られたデータに見られた逸脱を言語的、社会言語的及び社会文化的な逸脱に分類し、参加者の管理プロセスを細かく分析した。

3. インターアクション管理モデル

上述した特徴をもつインターアクションに適用するために、もとの言語管理モデルは改められる必要があった。変更点は次の図で表される。



このモデルは元の言語管理モデルと大きく三つの箇所では異なっている。まず、規範という段階は母語規範と接触規範に分けられる。次に評価の段階は、二分法ないし三分法の形ではなく、強い否定的評価から強い肯定的評価に達する尺度となった。モデルで見られるように、この尺度は強い否定的評価から強い肯定的評価まで連続している。その間に中立の領域も含まれるものと考えられる。最後に、「再処理」という新しい段階が右側に入った。「再処理」のプロセスには、評価の段階、調整計画及び調整計画の遂行段階のどの段階からも進むことができる。図で見られるように、一端、再処理が終わると再び評価へ戻ることができる。この働きを「再評価」と名づける。「再評価」という名前自体が示すように、評価の段階は再び繰り返されることが可能になるわけである。

3.1 規範と留意した逸脱

元の言語管理モデルと同じように最初の段階では、規範に対する逸脱が留意される。しかし、規範は一つの種類に限らない。たとえば、Neustupný (1985b)が指摘したように、隠在的 (covert) と顕在的 (overt)、自覚的 (aware) と無自覚的 (unaware) という種類の規範が存在する。更に非母語話者が適用する規範は不完全で (deficient)、改変適合されており (adapted)、母語・母文化からの干渉 (interference) があり、ある場面では硬直 (rigid) している場合がある (ibid. pp. 163–165)。

本研究のデータでは、母語場面の規範とは異なる接触場面の規範の存在も明らかになった。留意した逸脱もまた、母語規範に対する逸脱と接触場面の規範に対する逸脱が併存する。

以下の例では、中国人男性 (NNS) は日本人男性 (NS) のパーティーでのコミュニケーション・スタイルを肯定的に評価した。

NS: (大声で) 強くなったね、今度は。(声を出して笑う)

NNS: (笑う)

NS: 旅行の時、すごかったよ。もうベロンベロン。(二人笑う)

フォローアップ・インタビューでNNSはNSの話し方を肯定的に評価する。

「とてもいい、いいじゃないこの人…。面白いよ、その人…。日本人、普通の日本人との感じちょっと違う…。日本人はあまり喋らない、普通はよ。」

この例で、NSの話し方は他の日本人のスタイルと違うと判断され、NNSに肯定的に評価された。NSの行動が逸脱として留意されたことは明かである。しかしどのような規範に対する逸脱なのかを考えると、この例の複雑さが明らかになる。NNSの母語規範に対する逸脱であるとは考えにくい。却って評価から考えるとNSの話し方はNNSにとって自分の母語の規範と似ていると推測できる。NNSが留意した逸脱は、NNSが日本人のインタラクティブ行動に関する期待に対する逸脱である。つまり、NNSは自分の経験やいろいろな手段から得た情報に基づいて日本人の「普通」行動について規範を生成した。言い換えれば、接触場面の経験から接触規範を形成したと結論づけることができる。

上の例で、日本人母語話者はあまり話さず、面白い話題を提供しないという接触規範がNNSによって形成されていた。しかし、日本人母語話者の間では、このような規範は間違っていると思う人は少なくないのではないだろうか。NNSとNSの規範の間には、ずれがあり、NNSの母語規範と日本人母語話者の規範の間に位置づけることができる。

このような接触規範は日本人に対するステレオタイプ性が強いが、規範に対する逸脱が繰り返されれば、接触規範自体も変化するということが考えられる。特に逸脱が留意されない場合及び留意した逸脱が評価されない場合にみられるようである。

パーティー場面で、日本人男性が中国人女性の方に歩いていき、彼女にジュースを注いだ。フォローアップ・インタビューで中国人女性が次のように語った。

「日本人皆そうじゃないですか。」

日本人男性がかのじよのためにジュースを注いでくれたことに対して中国人留学生ははっきり逸脱を留意しなかったようである。しかし留学生が「皆」より「日本人皆」ということばを使ったことに注目する必要がある。「日本人皆」という使い方により、留学生は日

本人の行動を日本人以外の人の行動と区別していたことが明らかになる。しかし日本人男性がジュースを注いでくれたことは逸脱として留意されなかった。おそらく留学生は自分の経験や他のところから得た情報に基づいて、パーティー場面での日本人の行動についてある程度期待を形成していたと考えられる。それまでの経験では日本人男性の行動は逸脱として留意された可能性も十分あるだろう。留学生は日本人のインターアクション・パターンに慣れ、接触規範を生成したと言えるのではないだろうか。

同じような傾向は留意された逸脱が評価されない場合にもみられる。次の例では、日本人女性が交流室に入る時、二人の中国人学生が中国語で喋っていた。フォローアップ・インタビューからすると、日本人学生が留学生の行動について逸脱を留意した。

「中国語ぐらいい意識したと思う。でも、結構それは日常、普通にやることだから、そんなに強く意識しなかったと思います。」

日本人学生は中国語の使用を逸脱として留意したと報告している。しかしその逸脱は評価されなかった。管理理論の観点からみると、日本語母語話者がなぜ評価しなかったかという説明が興味深い。交流室では中国語の使用が日常的になっており、日本人学生にはあまり強く意識されなくなっていたようである。データ収集時点ではこのような逸脱を評価しなかったとしても、初めて中国語の使用を聞いた時には評価した可能性はある。

接触場面の参加者は同じような逸脱の留意が繰り返されると、だんだん評価がなくなり、接触場面の行動に慣れてしまうことがある。つまり、同じような逸脱の繰り返しにより、その逸脱に対する意識が弱くなり、接触規範が生成されていくわけである。

もちろん、全ての留意されない、または評価されない逸脱が接触規範と結びついているわけではない。留意されない、または評価されない逸脱にはいくつかの原因があり、中には、参加者にとってその逸脱があまり大したことではないと判断するケースもある。

以上の例で明らかにしたように、インターアクション管理を分析する際、逸脱が留意される場合、その逸脱はどのような規範に対して留意されたのかを深く考える必要がある。接触場面の参加者は自分の母語場面の規範を活性化するだけでなく、経験により接触場面の特徵に慣れ、接触規範も生成する場合がある。そしてその接触規範に対しても逸脱が留意され、評価され、調整の計画が立てられる。つまり母語場面の規範の場合と同じようにインターアクション管理が行われる。

3.2 評価

Neustupný (1994b, 1996) のモデルでは評価は否定的、又は肯定的評価にしか分かれていない。狭い意味の言語分析から考えると、このような分け方は理解しやすい。言語のレベルにおいて、使われている言語のほとんどは正しいか正しくないかというような判断にとどまるからである。言語以外の管理になると、そのように機械的に分けることができない。Marriott (1990) と Miyazaki (1997) の研究で使われている管理モデルには「中立した評価」というカテゴリーが含まれているが、そのカテゴリーはどこから来たのか、どのような理論に基づいて入れられたのかが不明である。

これまでの評価は二つか三つの独立した種類で表現された。評価があつたら否定的か肯定的または中立した評価か、一つのカテゴリーを選ばなければならなかった。ところがインターアクション上の逸脱（つまり社会言語的及び社会文化的な逸脱）を研究する場合、この三つのカテゴリーにきれいに入らない場合がある。さらに、一つの評価カテゴリーに色々な種類があるので、評価段階のカテゴリー化自体を考え直す必要があるだろう。例えば否定的評価の中には強い否定的評価とかなり弱いレベルの否定的評価が入っている。

以下の例で、ある日本人女性が中国人留学生の中国語使用を逸脱として留意し、フォローアップインタビューで次のように強く否定的に評価を表現した。

「日本語で話してくれればいいのにねー。日本語じゃないとやっぱり、話にまざって行けないし、共通の話題がもてないから、あの一中国語じゃなくて、日本語でしゃべってくれたら、私もまざれるのになー。話しかけると、Xさんと奥さんは日本語で話してくれるんだけど、他の中国人はどっちかというとな、中国語を使ってコソコソコソで喋っているのだから、せっかく外国に来てるんだから、その言葉を一生懸命覚えればいいのになーと思うんだけど。」

しかし全ての否定的評価はこれほど強くはない。次の例では、日本人男性も中国語の使用について語る。

「抵抗は感じないんですけど、やっぱり、まあ、自分が入っていけないですね。意味がわからないんで」

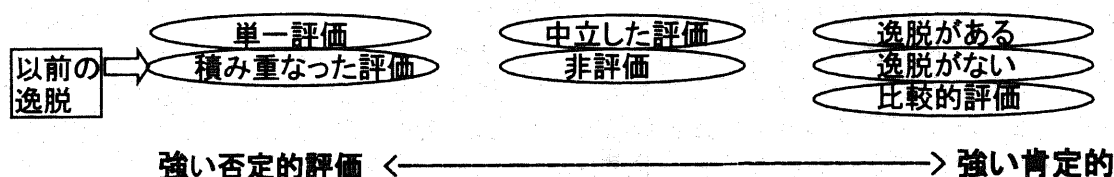
この日本人参加者は先の女性と同じような逸脱を留意したが、否定的な評価の程度はかなり違う。

以上の例と同様に、肯定的な評価にも程度の差が見られ、否定的評価及び肯定的評価に入れることができない留意した逸脱の評価もあった。このような現象から考えると、評価をカテゴリー化するより尺度として扱った方が合理的であろう。

では、評価は尺度的であるとする、肯定的な評価と否定的な評価の間に何があるのだろうか。例えば、ある中国人男性は日本人女性に戦争についての話をきかされた。中国人男性はその質問に対する反応をフォローアップ・インタビューで「ちょっとびっくりした」と語ったが、留意したのはその質問自体に対する逸脱ではなく、日本人にきかれたことであった。日本に来る前にきかれるだろうと考えていたが、実際には一度もきかれたことがなかった。今回がはじめてだったので、驚いたそうである。この例でみられる留学生の評価は肯定的でもないし、否定的でもなかったもので、中立的なものだと解釈できる。しかし、Marriott(1990)と Miyazaki (1997) などのように、否定的でも肯定的でもない評価はただ中立として解釈するだけでよいかは疑わしい。次節では、評価のサブカテゴリーと再処理の説明中でこの問題を扱いたい。

3.2.1 評価のサブカテゴリー

評価は尺度で示す方がよいといっても、それはインターアクション管理の評価段階の全てを説明できるわけではない。評価段階に様々な程度の評価があると同時に色々な種類の評価が存在する。否定的評価、肯定的評価や中立した評価だけでは不十分である。それぞれのカテゴリーには異なるサブカテゴリーもある。本研究のデータで見られたサブカテゴリーは次の図で表される。



①否定的評価

インタラクショndataから見ると、評価された逸脱は大きく2つに分けることができる。一つの逸脱を単独で留意することと、前に留意した逸脱と関係させて評価する場合である。

単一評価

単一評価は一つの逸脱を単独で評価する場合に見られる現象である。逸脱の評価を考える時、この種類の評価を思い出す人が少なくないであろう。例えば、次の例で中国人女子留学生(NNS1)はオーストラリア人留学生(NNS2)の「見ないで」について逸脱を留意する。この場面で、NNS2はパソコンに座り、メールを書いている。NNS1は隣に座り、パソコンの画面を見る。

NNS2: 見ないで

NNS1: ああ、私、ごめんなさい手紙を書いているとわからないから、私うちは無知じゃなくて、目が悪いから見えない、ハ、近くにいかないと(NNS1笑い)
わからないから、心配しないで、英語もわからないから

パソコンの画面をわざと見ていないので、NNS1はNNS2の「見ないで」を逸脱として留意し、「ああ、私、ごめんなさい・・・」のところから調整として自分の行動をNNS1に説明しようとする。NNS1はこのイベントを一つの逸脱として扱い、インタラクショ管理を適用した。

積み重なった評価

逸脱を以前に起こった逸脱と関係させる場合もある。上の場面に参加し、「見ないで」と言ったNNS2はNNS1の画面を見ることを逸脱として留意するが、フォローアップ・インタビューで語るように、その逸脱を単独に扱わなかった。

'Yeah this is (laughs) something that is a problem. There's another Chinese guy who is always in the computer room...I've forgotten his name but he's a first year, and he's quite (pause) well he, I don't know I consider he has very little respect for privacy 'cause he's always looking at what I'm writing or. Yeah he just, well like even if they say "look I don't know English" or "my eyesight's bad" you just, you don't know, ...this is something that even my aunt did when she came to visit me so I think it's just an Asian thing. Like, 'cause that particular E-mail was quite sensitive and so that's why I stopped her.... But like even if it was Russian or something I wouldn't even try to look at it, if it was me.]

「はい、このようなことは問題です。もう一人の中国人男性はいつもパソコンの部屋にいる.. 彼の名前忘れたが一年生です。彼は結構、まあ、彼はあまり他の人のプライバシーを尊重しない。彼はいつも私が書いているものを読む。まあ、彼は、でも彼らは「英語が分からない」や「目が悪い」と言っても、あれでしょう ... 私の(インド人)おばさんが日本に来た時、同じようなことをしたから、アジア人のことなのかな。でも今回書いていたメールはかなりプライベートなことが入っていたので、彼女を止めた.... でも私だったら、ロシア語書いてあったとしても、全然見ようとしません。」

NNS1 がパソコンの画面を見たことを NNS2 はプライバシーの規範に対する逸脱として留意したが、単独の出来事ではなく、以前に留意したことがある他のプライバシーに関する逸脱と関連づけている。他の中国人やアジア人が前に起こした逸脱と関連づけ、「アジア系の人にはプライバシーを守らない」というステレオタイプを強化している。以前の経験で同じような逸脱が留意されていなかったら、今回の NNS1 に対する評価は、そんなに強くならなかったと思われる。

以上のような種類の否定的評価を積み重なった評価と名づける。積み重なった評価は一人に対する悪いイメージを固定する他、上の例のように、一つのグループに対してステレオタイプを強化する恐れもある。同じような逸脱が繰り返されると、そのような逸脱に「慣れる」より、前に留意した逸脱をただ強調するだけに終わることになる。ある場合には、評価の程度も強めることもありうる。

②肯定的評価

管理理論によると、インタラクショ管理の中にはいくつかの肯定的評価の種類が見られる。Neustupný (1994) では、肯定的評価には2つの種類があると強調している。その2つとは逸脱に対する評価と逸脱がないことを肯定的に評価することである。このような傾向は、今回のデータのうち、社会言語的及び社会文化的な逸脱にも見られた。

次の例では日本人女性 (NS1) は中国人男性 (NNS1) の会話参加を肯定的に評価する。この場面で NS1 はある中国人中学生が日本で問題を抱えている話を中国人男性二人 (NNS1, NNS2) と中国人女性 (NNS3) にする。

NNS3: ああ、かわいそうですね。

NS1: うん、中学生から

NNS3: 一人で?

NS1: うん、一人で

NNS1: どこから?

NS1: やっぱ、中国から

フォローアップ・インタビューで NS1 は NNS1 の会話参加を肯定的に評価した。

「協力してくれる、こう姿勢を見せてくれたんで、ありがたいな—と思いました」

また、Enomoto (1993) によると、比較から生み出される肯定的評価というサブカテゴリーもある。今回のデータでも、フォローアップ・インタビューの別なところで、NS1 は NNS2 の行動を否定的に評価した。この NNS2 に対しての評価は実際には比較的な評価であったことが明らかになった。NS1 が話している間、実は、NNS2 はずっと彼女の前で新聞を読んでいた。

「今の NNS2 がずっところ新聞を読んでいたのはすごく気になりましたね…なんか新聞こうやられたら、なんか壁があるんじゃないんですか。なんかそれは失礼だなというかね。」

この発言から考えると、NS1 が NNS1 の会話参加を肯定的に評価した原因は NNS1 の行動から出たものではなく、NNS2 の行動との比較から出たものであることがわかる。NNS1 が NS1 の話を聞いている間、NNS2 はずっと新聞を読んでおり、NS1 を無視したような形であった。NS1 が大切な話を中国人留学生皆にしようとしたのに、NNS2 は興味を持たなかった

ようであった。彼の行動をととても強く否定的に評価し、NNS2 が失礼だと NS1 は考えてしまった。

Enomoto (1993) は、他の否定的に評価された逸脱があるので、肯定的評価は強調されると主張した。しかし、他方で、NS1 は NNS2 をこのように極めて否定的に評価したからこそ NNS1 の行動が肯定的にみえたのであり、否定的評価なしには、このような肯定的評価が行われなかったと言わなければならない。つまり、比較によって NNS2 の否定的な評価もまた更に強調されていると考えることができる。

③その他の評価

すでに述べたように、否定的及び肯定的評価でない例の中には「中立」評価がある。しかし全ての例を簡単に「中立」として説明できるわけではない。次の場面で日本人女性 (NS) がアメリカ人女性 (NNS の先生) に関する話を聞いている。

NNS: その人昨日出会った、駅で

NS: ああ

NNS: 夜の12時

NS: よる!

NNS: そう

NS: おー

フォローアップ・インタビューで NS は先生の夜の行動について次のよう説明した。

「なんか元気だな。というのは月曜日からこう一週間が始まるんじゃないんですか。うちの場合よく日曜日ぐらいはゆっくりして一週間ぐらいがんばろうというのはあったんで、元気だね。」

NS は先生の日曜日の夜遅くまで外出することに対して逸脱を留意するが、それは本当に評価まで至るものなのか、中立的なのか、ただフォローアップ・インタビューのために留意を言葉にしたものなのかははっきりしない。むしろ、中立した弱い評価あるいは留意の強い発話と考えることができそうである。

以上の例のように、否定的評価と肯定的評価の間の評価が「中立した評価だ」とは簡単に説明できない。評価の段階だけではなく、管理プロセスの全ての段階について考える必要がある。インターアクション管理理論に関する全ての問題は本研究で解決できないので、研究拡大の必要性を強調したい。

3.3 再処理

管理プロセスでは、評価が行われた場合、次の段階は調整の計画を立てるか立てないかになる。しかし本研究のデータを分析すると、評価が行われてから、直接、調整計画に至る前に、べつのプロセスがみられた。インターアクション・データの分析により、評価した逸脱と関係するもう一つの段階の存在がわかった。本研究ではこの新しい段階を「再処理」と名づけた。

ここでいう再処理とは、簡単に説明すれば、評価を考え直すことである。参加者はよくフォローアップ・インタビューで一応評価を行うが、特に否定的評価の場合、その評価を考え直す傾向がある。このような再処理により、最初の否定的な評価が弱くなる場合がよくある。否定的な評価が肯定的評価に変わる場合もあった。本調査データのパーティー場

面で、中国人男性（NNS）が早く片付け始めたことがあった。このことに対して日本人女性（NS）が逸脱を留意し、軽く否定的に評価した。

「早いなと思いました。」

片づけの早さに対してやや否定的な評価をしたが、NNS の他の場面での様子と比較した結果、片付けてくれたこと自体に対する肯定的な評価へと再評価が行われた。

「NNS はちょっと特別な分類に入ってて、なんというか…もう仲間というみたいな感じになっちゃう部分があるから…でもパーティーとかにおいて、片付けとか留学生とか手伝ってくれる人の中に入って、それはすごいありがたいな。」

このような再処理という現象があることから、評価の段階が固定されていないことがわかる。留意した逸脱を評価したといっても、評価のプロセスは必ずしもそこで終わるわけではない。評価が一度行なわれても、その評価を変える可能性は十分にある。

また、再処理には以上の 3.2 と 3.2.1 で挙げた中立した評価と結びついている特徴もある。この特徴を一次的な評価がなくなった状態を示す現象という意味で、非評価化（de-evaluation）と名づける。次の例では、オーストラリア人女性（NNS1）は日本の大学とオーストラリアの大学のパソコン設備について話していた。自分の大学でパソコンは 24 時間使えるのに、日本だと空時間内に部屋から追い出されたことがあった。フォローアップ・インタビューで NNS1 は次のように語った。

「I was talking about the computer rooms in my own university and why I was so surprised that this one closed early.」

「私は自分の大学のパソコン部屋について話した。そして、この大学の部屋が早く閉まることに対して驚いた。」

この例で、NNS1 は驚いたというが、3.2 の中立した評価の例で見られた驚きとは明らかに違う。驚いたとは報告したが、ビデオのデータ、及びその場面に参加した二人の日本人の話では、実際はその場面で NNS1 は怒っていた。その気持ちはフォローアップ・インタビューでは「驚き」として説明されており、既に再処理が行われていたと解釈しなければ整合性が保てない。怒りで表現された強い否定的評価が再処理により、フォローアップ・インタビューで非評価化されたと考えられる。怒りの場面から離れたので、参加者はフォローアップ・インタビューで厳しく評価することを回避したのではないだろうか。

なお、なぜ参加者は厳しく評価したくないかという理由には二つの可能性がある。まず一つはインターアクションの外のもっと強い要因の存在である。例えば「他人や他の国の悪口を言うてはいけない」、「悪口を言うと、自分のイメージが悪くなる」などのマクシム（maxim）が働いていたと考えることができる。もう一つの可能性は、参加者は目標文化に適応しようとしたことである。留意した逸脱を否定的に評価すれば、相手の文化を理解しようとする態度と反するため、避けたいと考える参加者がいてもおかしくはない。つまり、再処理は異文化適応のプロセスと結びついていると言えるだろう。

また、再評価が肯定的評価の後に来る可能性も否定できない。本研究では、再処理については再評価までのプロセスしか扱えないが、接触場面規範の生成や調整の変化とつながる可能性もある。更に詳しい研究が必要になることは確かであろう。

3.4 調整

元のモデルと同じように調整の計画が作られ、遂行される場合とされない場合がある。本研究で調整の段階まで修正することできなかったが、研究が広げれば、この段階を含め、管理プロセス全体の見直しを提案できるのではないかと考えている。

4. 結論

本研究では、管理理論を狭い意味の言語的な対象よりもっと広い範囲に適用しようとする、モデルを修正する必要があることを述べた。言語的逸脱の分析にとって十分であるモデルは必ずしもインターアクションの全てのプロセスに適當ではない。今回は規範と評価の段階に限ったが、この理論の普及には、インターアクションの管理モデル全体を考える必要がある。

まず、留意された逸脱を分析する時、その逸脱はどんな規範に対して留意されたのかを調べる必要がある。接触場面に参加する人は母語場面の規範と同時に接触場面の規範を創造する。この結果、母語場面で留意されるような逸脱は接触場面で許され、留意されない場合がある。また、参加者が経験を繰り返した結果、接触場面で留意される逸脱に慣れ、評価や留意をしなくなってしまう、新しい接触規範が生成される現象もみられた。

評価の段階では、カテゴリーに分けない可能性を述べた。評価は尺度の連続体として表現でき、強い否定的な評価から強い肯定的な評価まで及ぶ。更に、否定的評価や肯定的評価といっても、その中にバリエーションがあり、それぞれ違う働きをする。尺度の両端の間に中立した評価があるが、全てをこのように定義づけることはできない。「中立した評価」とは名づけやすいかもしれないが、事実をもっと複雑であると考えられる。

最後に、言語管理モデルにまだ見られなかった段階の存在が明らかになった。本研究では、その段階を「再処理」と名づけた。これは、評価を考え直し、再評価を行う現象である。再処理の結果、否定的評価が弱くなったり、肯定的評価に変わったり、非評価の場合にみられたように完全になくなったりする場合もある。このような傾向はインターアクション習得に影響があると思われるが、どこまで影響するのか、更に研究が必要である。

インターアクション研究のために管理理論は重要な分析方法であり、接触場面で行われるインターアクションのプロセスを理解するためには不可欠である。ここではいくつかの修正の提案をしたが、まだ解決していない問題が残っている。これから議論が広がり、モデルの改善のための研究が進めば、もっと広い範囲の分野にインターアクション管理理論を普及させることが可能になるのではないだろうか。

参考文献

- Asaoka, T. (1985) *Behavioural Patterns and Perceived Interactional Difficulties of Australian Tourists in Japan*. Melbourne: MA Thesis, Japanese Department, Monash University.
- Enomoto, Sanae (1993) *Native speaker reactions to non-native speakers' deviations from the politeness norms in Japanese tour guiding situation*. Masters Thesis: Monash University, Melbourne
- Fairbrother, L.C. (1999) *The management of cultural deviations in contact situations*. Masters Thesis: Chiba University, Japan
- Fan, S.K.C. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13-3, 237-252

- Fan, S.K.C. (1999) Language problems in Japanese conversations between non-native speakers. *The Japanese Journal of Language in Society*, Vol. 2. No.1
- Jernudd, B.H. and Neustupný, J.V. (1987) Language planning: for whom? In Laforge, L. (Ed.) *Proceedings of the International Symposium on Language Planning*, 69-84. Quebec: Les Presses de l'université Laval
- Marriott, H. (1990). Intercultural business negotiations: the problem of norm discrepancy. *Australian Review of Applied Linguistics*, Series S, 7, 33-65.
- Marriott, H. (1991). Etiquette in intercultural situations: a Japanese business luncheon. *Intercultural Communication Studies* 1:1, 69-94
- Marriott, H. (1993) A note on interlanguage/interculture in Australian-Japanese business communication. *Journal of the Association of Teachers of Japanese*.
- Masumi-So, H. (1997) *Developing a framework for research into norms in Australian-Japanese contact situations: From the point of view of teaching Japanese as a foreign language (TJFL) in Australia*. Paper presented at the 10th Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia, July 6-10, 1997, Melbourne.
- Miyazaki, S. (1997) *Communicative adjustment between native speakers and non-native speakers of Japanese*. Ph.D Thesis: Monash University.
- Neustupný, J.V. (1985a) Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J.B. (Ed.). *Cross-cultural encounters: communication and miscommunication*. 44-84. Melbourne: River Seine.
- Neustupný, J.V. (1985b) Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (Ed.) *Australia, meeting place of languages*. 161-170. Canberra: Pacific Linguistics.
- Neustupný, J.V. (1987) *Communicating with the Japanese*. The Japan Times.
- ネウストプニー, J.V. (1994a). 「日本研究の方法論：データ収集の段階」(『待兼山論叢』 28 日本語学篇 1 - 24)
- Neustupný, J.V. (1994b). Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (Eds.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution*. 50-69 Singapore: Academic Press
- Neustupný, J.V. (1996). Current issues in Japanese-foreign contact situations. In International Research Centre for Japanese Studies (Ed.) *Kyoto Conference on Japanese Studies 1994*, 2, 208-216.